

Carpe diem

MCR15 期 医療経済学分野 専門職学位課程 糸島 尚

京都大学 SPH に入学し、MCR コースを受講し始めてから早いもので8カ月経過した。入学したときには満開の桜が咲き誇っていた京都も、気づけば鮮やかな紅葉に彩られ季節の変化、時間の経過を感じさせ、もう間もなく1年経とうしていることを教えてくれている。

今回 MCR 日記を書く機会をいただいたので、入学してからのことを振り返りつつ、後輩の方々の参考に少しでもなればと思い感じていることを書かせていただく。

SPH への入学、MCR コースの受講を考えたのはちょうど1年半ほど前であった。私は元々急性期の市中病院で働く消化器内科医で初期研修医の頃から消化器内科医を志望し、多くの知識や手技を身に着けて患者さんの治療に活かしていきたいと思い働いてきた。しかし、医師になって10年経ち、振り返ったときに診療で学んだことを研究という形で広く社会に還元することが出来ていないことを実感し、臨床研究をやってみたい、やり方を学びたいと思い入学を考えた。入学でき本当に良かったと思う。

3月に10年近く勤めた病院を休職という形で離れ、新しいことを学ぶことへの大きな期待と大きく異なる環境への若干の不安を抱え京都へやってきた。入学式を終え、しばらくすると授業が始まったがどの授業もとても面白いものであった。学生になるのは久しぶりだったので机に座って90分間受けていられるか心配だったが杞憂であった。今まで知らなかった新しいことや表面的なことしか知らなかったことの深い部分まで学ぶことができるということは大きな喜びであった。また大学生の頃とは違い、グループワークや実習が多い能動的な授業が多いことも SPH の特徴で面白いと感じる理由であろう。SPH には医療職者でも様々な職種の方々がおり、また非医療職の方々もおられ、年齢も様々と多様性も大きな魅力で、そういった皆と一緒にグループワークなどを通じて学ぶことはとても得るものが大きい。授業をしてくださる先生方の素晴らしさは言わずもがなである。教え方はとても上手く、面白く深い内容で、学生が興味を持てるように練っておられることを感じる。

もちろん楽しい、嬉しいことばかりでなく大変なこともある。それは試験や課題である。当然これらに取り組むことで自分の力がアップするわけなのでよいことではあるが、前期は特に授業が多く、決められた期間に課題を提出し試験勉強

強を行うのは大変なことであった。またこれは個人的なことだが、これまでまともなレポートを書いたことがなく書き方も分からなかった。そのため最初の頃に提出した授業レポートは、今見返すと本当に感想文レベルのような内容であったが、社会人になって10年以上経ちようやくレポートの書き方を勉強したことも今となればよい思い出であり、SPHでの様々な経験が自分の力となっている。

こういった授業と並行し MCR コースを受講している学生の発表が始まった。SPHの魅力の一つはその多様性であると思うが、逆に MCR コースは基本的には臨床を行っている医師が学生というある意味で均一な集団であることが一つの魅力である。もちろん完全に均一な集団というわけではなく出身地や診療科、年齢も様々で多様性も内包しており、SPHにあっても貴重な場であろうと感じる。医師以外の視点を取り入れた方がよい点もたくさんあれば、医師だからこそその視点もあり、それらをバランス良く併せ持つのが MCR コースという場ではないだろうか。参加している学生の大きな共通点としては皆これまでの診療で感じた疑問を解決し臨床研究をやりたいという気持ちだろう。4月の自己紹介や普段の会話、発表で感じることだが、臨床研究への大きな情熱があり、その共通の目的に向かって一緒に頑張っていることが重要なことだと思う。同期の皆が発表するにあたり練り上げてきたテーマや内容はどれも素晴らしく、新たな気づきが多い。自分が発表をして質問やコメントをもらえることは当然勉強になるが、同期の皆の発表を聴くことも非常に勉強になる。そして発表後の質疑応答も同様である。自分では疑問にも思わないところでの質問を聴くとなるほどと思わされ、もっと深く考える必要性や視野、知識を深める必要性を感じることが出来る。またきちんとした質問をする上では、自分自身が文献を読んだりするなど下準備が重要で、プレプロマネ、プロマネに参加することでたくさんのお話を学べると思う。

そしてさらに MCR コースの価値を高めているのが、教員の先生方である。やはり学生だけでは知らないこと、視えていないもの、不足している経験があり、教員の先生方がそれらを的確に補ってくださる。時に鋭いご意見もあるが、決して批判的ではなくどうすれば学生が考えている研究が良くなるかという建設的な助言であり、それを聴く学生も発表者以外でも臨床研究を行うにあたりどういったことが重要で注意する点なのかを学ぶことができる。こういった真剣な学びの場が学生の発表毎にあると考えるととても贅沢なことで、MCR コースの素晴らしいところである。

冒頭に記載した題名は古代ローマの詩人ホラティウスという人物が著作にラ

テン語で書いたもので、英語では seize the day と言われている。直訳すると「その日を摘め」という意味らしく、解釈は色々あるようだが「今を大切に、その日を大切に生きろ」という意味のようである。以前本で読んで気に入った言葉だが、今にぴったりだと思い引用した。時の流れは早く既に MCR コースも後半へ突入し、SPH での学生生活も 1 年が経過しようとしている。知り合うことができた仲間とは今後も一緒に勉強したり、研究を行っていくこともあると思うが、皆でこのような濃密な時間を過ごすことができる期間は一生の中でも限られているのではないか。そう考えると残りの学生生活 1 日 1 日を大切に過ごしていかなければならないと強く感じている。今後入学される後輩の皆さんもこの京都大学 SPH・MCR コースという素晴らしい場所で、ぜひ貴重な時間を大切に、たくさんの方のことを学んで充実した学生生活を送っていただければと思う。